



講座のために用意されたおもちゃの数々

奈良おもちゃ博物館の学芸員養成講座に、町内外から36人が参加



来年、三郷町におもちゃ博物館オープン 運営の要「学芸員」の養成講座開催

三郷町立野北のF S S 35キャンパスに来年3月開館する「奈良おもちゃ美術館(仮称)」で、数百種類にのぼる、おもちゃを使った遊びの提供や館内の案内などを行う「おもちゃ学芸員」の養成講座が8、9の両日、同町勢野西の町文化センターで開催された。20歳代から70歳代の男女計36人が参加。他県にある「おもちゃ美術館」を例にあげての説明や、実際におもちゃに触れるなど、参加者らは学芸員についての知識や心構えを学んだ。



おもちゃ博物館や学芸員などについて説明する橘高さん



聞き出した相手のプロフィールを基に、他の人へその人を紹介

おもちゃ美術館は、国内外から集めた木のおもちゃを使用した木育の普及や良質な遊びを、年代、国籍、障害の有無を問わずに提供する体験型ミュージアム。「おもちゃはアート」の考えから、美術館と名付けている。東京都や徳島県、沖縄県などで12館展開。基本的な運営方針や仕組みは共通だが、地域ごとに地元のおもちゃの展示や、その場所ならではのレイアウトデザインを採用している。各館はそれぞれ自治体や団体などが運営。基本的な運営方針の指導と、専属で活動する各館の「おもちゃ学芸員」養成講座などについては、NPO法人芸術と遊び創造協会(東京都新宿区・多田千尋理事長)が行っている。

奈良おもちゃ美術館は三郷町が設立し、社会福祉法



見たこともないおもちゃを前に、遊び方を確認し実際に遊んでみる参加者ら



養成講座であいさつする木谷町長

人権協会(和歌山県紀の川市・前田効多郎理事長)が運営。館内では、奈良の町並みの特徴を表現する「通り」で分け、遊びの中に三郷町や奈良県の文化的な特徴を取り入れるとしている。

養成講座冒頭で木谷慎一郎町長は「本日受講いただいたのは、運営の要になるおもちゃ学芸員の養成講座です。関西初のおもちゃ美術館は、子どもから高齢者まで、年齢関係なく自然と交流できる場になるかと思えます。三郷町では『つながりを作る』をキーワードに取り組んでいますので、この場から多世代交流のまちづくりになれば」と話した。

引き続き、東京おもちゃ美術館副館長兼運営部長の橘高春生(きつたかはるみ)さんが、全国12館での取り組みや実際にあった事例などを挙げ、おもちゃ学芸員の活動内容や心構えなどを説明した。

他にも同館で共通して取り扱う、遊びを通して五感を磨くことのできるおもちゃが認定される「グッド・トイ」の他、「木育玩具」や「郷土玩具、伝統玩具、伝統工芸品」などを解説。参加者らはメモを取るなど真剣に話を聞きながら、橘高さんのユーモラスな説明に笑い声を上げた。

講座では、実際におもちゃに触れる場面も。台湾生まれのプラスチック知育玩具「ジェリク」は、一般的な遊び方の例に上げられる動物や星などさまざまな形を表現するのではなく、じやんにに勝利するたび相手のプロフィールを聞き出し、その回数を数えるのに使用。ジェリクで数えられる上限に達したところで、聞き出したプロフィールを基に、他の人たちへその人を紹介。交流を図ると共に、固定概念にとらわれない遊び方でゲームを生み出し提供する「おもちゃ学芸員」の活動例を体験した。

また講座で用意した「グッド・トイ」を、各グループに1つずつ分配。「グッド・トイ」は、直感的に遊び方が分かるものから、説明を熟読しないと理解できないものまでさまざま。これまで見たこともないようなおもちゃを前に参加者らは遊び方を確認していた。

各グループで実際に遊んだあとは、1人と「グッド・トイ」を残して別のグループメンバーと交代。残った1人が「グッド・トイ」の遊び方をレクチャーし、グループのコミュニケーションをとる「おもちゃ学芸員」の模擬体験を行った。



他のグループに1人だけ移動して、おもちゃの遊び方やコミュニケーションをとり「おもちゃ学芸員」の仕事体験



知識や心構え、楽しく学ぶ